奥羽道中膝栗毛四編

中

へ13
1164
63

特
へ13
1164
63

東京都立中央図書館

與羽一覽 道中膝栗毛第四編卷之中

十返舍一九著

前半 明治 東京都立中央図書館 田中

旅行用心集 小云前略「衣紙中のゆへ諸事紙代の意ゐまらせ必さらふ爲ふ代都而紙中のゆへ紙中の法式ありて忌嫌ふものあるべバ紙手の邪ゲ ふ有ぬ様よする事一とす云云。とゝんえるぞ遠ひゐきの真中ゆゝて一寸下ハ地獄とおぼおそるべき紙中ゆゝてバ小ハゲそゝぢめの程の大里ゑゝち今ハまゝ菜

ふたゝびぐとあまて延高ふうちむうひ北八「モシ」先生何もさう
おしゝ垂言くゝゐあさるといねへ。何のとういつて源氏まゝせの仕振も
ありさうなものぐふ扨く友達げへのねへとろく延「あんらういひ
めせうらふきせちあいゐ見せてまんぐどうせろといひめた
「モシ」先生春歌を一首ひねり出しそは毎のうどろを
べいいどうぢやろう延「エイ」和尚までがわんてふゆとくぞい
吉北孔のこっさら何も知らぬ〳〵「ナンノ」知らぬといつて
とて今更うつちゆて置あう今朝も孫次さんが圓彦へおつ

こっくと記共そ立合て訳評定ふおうんぐぢやァぬへうのでもお
親方二筒共孫二さんの撰合ぐモシ加十「親」方うちだうぢやア
有やせん此二人の流も孫次弟子清の連でどざりゆ仕何を吹く
はせうかくゆ私ハ北八とゆそれ〳〵人のふい男ぢ女中があるこ
の御新造とも知ぐぐさいぜんよりの恋れの怪偏ふお見〳〵ぐ
さくふい生々せそのゆ高ぬ「武」士でいやい町人が大ふであいとゆ腰を
あげぐ〳〵お記ゆ。コレ平ふく。コリヤ俳肉でいあい先生あるこ
ふお記をあさらぬうトおどけ「モシ」先生ちくふ加十「エ」ふさうでゆあい

この頃ひさァおどけさるひいつこ炭と孫次郎長清といふ男の行方
をゐざらッせへョ悪く四の五のロいきくとこの舟かゝどんぶり
とごそふ〳〵加十さァ所詮あめ〳〵酢でいふこッちゃァあいふいつ
そのまゝ川中へさらひ込で脱いせふしてやろかナア北「アヽコレく
そんな縁氣あまりを女ごらふりのでいあい紬振合も他生の縁
柏屋でお世話ゐまつる女中衆ともく加十親方の膝枕
ざいて吾等三人の命を助けてくんおせへ〳〵イヤく何とかい
ふかつても孫次郎長清さんを出さらさんきねへうちハウ加十

さァ北八〳〵アりくまるその振あむどらまをいひあさる女鶏さく
めて雄鶏がつゞふとやらふるまがあり孫次郎のとりかとゐいひくるあ
て加十親方の四つ筒のあるやう編みお那ひでこそう実「コレ
主達あんとがあくらもつても素人でう筒いあんぬへくト
ゐるふ更るちくら有れとそうふくれてらぞくをふして来ゝ舟「コレ加十ュ
むどんかゝるとりくゝ一そゝのそくしぶきごきこるそかナみむゐ
そッちゃァ舟とおせやらねつてゞュこんさらあんぶう仕度が有とつて来
合を外舟へ廻りそくれろと頼ごァで飲付ふあまつく変へこう
て人おらも多くの陽が新ごァかあおいやく出関所ろぐでん

ぐり眼のおんぢいらぢしやぢのこぢかくりくさんがうッ遠さアエ早く
たてきあげておうさ附てとせへ川中ぢやァかう南〜へいく「エイこれ
もまあこエ呑をやうくいつてとせへとん運う雪ぢアエト　ふをとき出北八へまを合せ
てかの一そうの赤を北「南無あつかうや船頭大明神さま捨る神あれば
又おうそふしたを助る神ありこんとのつすぢ向へよりせへもれバモウとつちのものぢ
先生の観羅さんの氣を丈夫ん持あせへとの北八さんがつい
てゐるから大船へ多さ積でゐるおさるぢい。ぜお関所の渡場で
何のとゝるヨリが出来るものゝ〜ぢいまく〜ぢい加十「エ、悪くいぢらッ

あるあるあへ舟ハあつてもとんさ〜達ハ川中へぢんぢイサ　爻「まんぢ
きせちあいるゆいハモシつよ北八きさきよ「それぢやァおめんどうあつて。
品箱の余をとんなさるのうへちゝ「あんちうこうるもかナ「余と合
この恐ぢ愛誰主」の二ツ主ぢア北「へンとんぢ持をしぢト　まこうあさ北一が
ハ主ハ北ハまいとあさふめて北「ア、モウ〜何もかも組東ぢとくあまくらめて
「くそうあしてうれを乗
こんぢ行明て〜まひやせうなをかくさう品箱ハこの女中ま
かを命のある孫次郎を清とこの六人の達の赤ふとしくさう
で此女中ぢ前の主因義とも知ぢ吾箱の達の弥平ぢ

かくて合て面目次第もあい仕合それおつけ孫ひさんい一人
渡唐の天神のとうらへふ孫を引つれて先別との後嗣を
通りぬけて先の宿のく何とうらいつさきそれく古河とう
ゆぐのたしう梅屋とう竹屋とうい茶屋で一盃やりて仕合て
ゐるつのり早いをあしが孫ひさんふ海ゐさうさへそれい妻
細ゆ知て道理なのでも古河生でこのおとさんを引ぬきもつて
相対撰合ふ去あさる方がマア上分別ぢやアありやせんとト
あまりのはらあきあかナ　ソレ又さつせへお前方も一ツ宛の狐の分さ
てさらをとるを

そらぐしいてゆ蛍へこかつしあるさうりあがさうりやア
四の五のあしふ母をつけやせうコレお蠟母ちらあがつく
そぐれかされめへ用心せへヨおれもあとから直いくからヨ梅
屋ゝ竹屋うさア大方横屋の間遠ざアみ原町うゝ臺町
一々氣ィつけていけヨよホニ おのゝ達やア命冥加ゐ男荒
ざアヒ　ハイく左様くああこのお情ざろで二人の命の
拾ひりのをいゝまさとのお礼い古河の横屋とやらで吾
が連の孫ひさんふ去とうゐおとらせて出返報をいゝ

茶屋新田これより
東の方十町余行ハ
南ハ逢見村と大堤と
しく両村の間ハ
上水ありその所ハ
ゆる土橋を静江前の
思案橋といふ静美經
の跡を慕ひ此所より来り
興あるべくべくやとまた
べくやと思案せし所ありと
いひ伝ふ
宝暦七年古河の弘法の
加持水ありと好民云つゝ
江戸近辺より叅詣

摩集し水を浴して難病
多く愈ゆるどこちく
ひあるひとるいこの土ぞしの
下の水まてあるとゝもあれ
空言ゆてありしとゝ

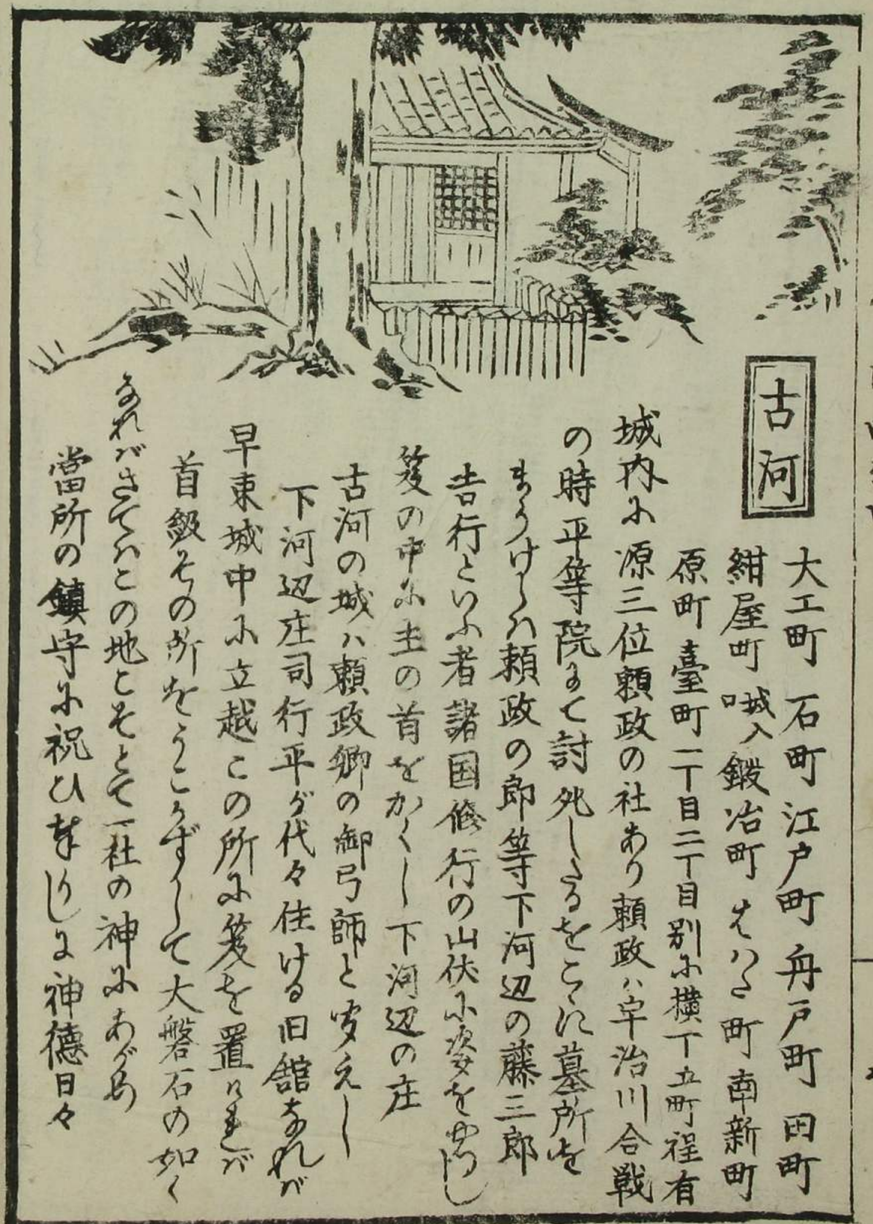
延「やりくよんときもだまをうッぐり逐〳〵こちらへうちも同志
く架「リ」落りかぢ。ア、あぶねへくまぶ止掉もやんねへふ
サア〳〵お蜻ひッ射ていぐがら〳〵北「お蜻さんふ吸射ていりれち
やア所徐えあれるあさアあるめへモシ親旨とのふいとうちが新りき
しさ丈夫孫ばさんふ逢せ世ばうふお前あとかふ早くお出
あせへモウ〳〵かうあつちやアぐらさるよりあぶつさるぶ。支度
ばくも家身ふやアかへられぬへ思へづくこいめまーい孫ば
さんざ早く搦屋へいつて大きあ目ふ合せて乗りたへ。サアく行宵う

そんあら親方大きふおせ結ふあり中〳〵架「へかそんのおめへ
是切手打ふあつさとりふぢやアあー。挟投るやアおよびやー
ぬへ何分お蜻をさのこと。そんざらおめへ方もお達者でお出
あせへ延「孫新〳〵ト舟より皆そくがふあぐりお蜻ぐらるさく
つ新まどふふ往方をうしあ北八へ商産しのぢの口かふ出
ぬうせ。梅屋竹屋といひしが大宵搦屋ぐあらうとの
加十が鑒定ふ一先虎口へのうれーらど前門虎をさけうく後
門狼ふあふ諺ふひらく。さんざの北八も一白の酒屋も出べ

延高筑羅房も共々脚をいらあて一言の口も開沢屠所ふ
いる羊のあゆをふひとゝく中田の宿ふいれば右ふ常磐筑
波山見元室ものどうれれとうれど物思ふ身の中くゆうちあふ
ぐらもせでうちまわれ宿の入口東の方ふ八幡香取の両社あれ
ど。まうでんとまる氣色もあく此宿の名物として肉刺の茶を賣
家いあれど一首の口ぜさゝも出沢茶屋新田をうちもうれば
宿の入口より往還の左右ふ松並木うちつづき街道廣く甚
平ふてその奇麗いとへるあゝとゆて始て延高ゝちとゞ

まり一首

忘いけゝれのう新橋をできてもゝじめて八ア氣のう
清そとゝさアモシちくう「とんざアけゝきいよんと外ふもあんまし」「ある
ア」どこのくゝゐ無羅ふ松原ハ東海道ふもありやせん延「この
けゝれで一首でるまづだつかろグモシヤ「どゝゝとくこのお晴
さんふかう吸つゝれてゐて一首ハおろう一句平句もでるこう
ちゆアぬへまと「さよサヨとゝが吸つゝいざゝのど雷さゑゞあら
ゝやつてもまゐれることちやゞおりまゝあいサアくもう今ふ
堂町の揺屋へきゐさアむやく孫八庄兵衛振ふ逢ゝゝ



古河

大工町　石町　江戸町　舟戸町　田町
紺屋町　城入鍛冶町　そうし町　南新町
原町　臺町　二丁目　三丁目　別ふ横丁　立町　程有
城内ふ源三位頼政の社あり頼政ハ宇治川合戦
の時平等院まて討死しるをこゝに墓所を
ちうけ〳〵ハ頼政の郎等下河辺の藤三郎
吉行とふ者諸国倦行の山伏ふ変を出し
変の中ふ主の首をかくし下河辺の庄
古河の城ハ頼政卿の御弓師と変え
下河辺庄司行平ゞ代々住ける旧館あれば
早東城中ふ立越この所ふ変を置りまゞ
首級その所をうこゝずして大磐石の如く
あればさてこの地とそゝ一社の神ふあゞら
當所の鎮守ふ祝ひまりしよ神徳日々

さい那甘藷野良めぐ延へハアあれハ名ハおまへハ蜘あつらへハもそ
きでとんこひッついさァちかろきこ「ヨいやあの甘藷ハいけこ
蕃薯ハおこなゞちよこらんと細くッてぜんぜら縄い太いさつ
まいりの味いのこるいそのくせうるさいひつこい蕃薯でこりく
ゑめハあいきーッけエ北へハハアこめこうちゃアちこさつま芋
をふうーても食さ吐ーこと思ひ申さハ。とんざこづま芋
の噪どきいてちつとこうちもその芋ハあやうりたくあつこ
きゆーさァ〳〵〳〵ト。うち笑ひつ行ゐどハ早くも古河あぞつき

ハける。寵より西の方四五町ハ鴻の巣とひふところあ
り古河公方殿氏の旧所跡とぞ。その名のこいひつこへ
さり。その所ハ徳光院とらいふ寺あり。まこ同西の方
十四五町ハ牧の字村なり。松月院といふ寺の樹林の
うちハ塚あり上ハ石塔の立ちぶ御所塚なり
とぞ。文字あれども苔ハ明らかぞ。
寵より十町程西長谷村ハ養生院といふ寺あり
二ツ寺とも禅宗ハて何れも古河公方の菩提寺とハ

とゝふまつ孫兵衛清八ハ此ぎあう形ふ出つゝ。これご白盃をさゝるゑ。何のとも面月をしあい。さしゞ加十お蝶の虎ゝをのゞれんと死ゝ死をさのび〳〵甲斐ありてまんまと桑名の関所をとゝえて中田ふ渡りそれより直ぐ古河の墨町おつきこの町の伊勢屋といへる宿屋ふとゝ。ゝ来るべのものあれば是幸とさゞ称行て今はいとゝふ日をさしゞ明日の未明ふ發足して奥ゝ二階ふ一人急ぎさしゞがいろ〳〵てゝも雨具ゝ牧まてゝ何の方へも行雖

られぐまゝとの合羽を賣だやと宿の女房ふとのゝ。ゝを告ゞるふ幸江戸より古兵を仕入ゝかゝりといふ旅人ゝ。ゝまゞ早速ふ相終てその日。孫兵衛清八合羽ゝ牧を賣ゝ。ゝて小奇麗なる木綿布子ふ細家帯ゞどゝをゝ。ゝ今ハ古ゝろ出ゝ。ゝて酒のゝゝゝひ前後もゝゝびうちふ〳〵ゝるゝまゝ旅のうさをしふ〳〵ゝいとをう。ゝ丈ふ引ゝて北八ハ彼お稲ふそゞはゞれば吸つれて。橋屋といふ小料理ゝ茶店の二階ふのゞり何がゝ〳〵ゝて加十の

きてらざるうちふお蜻をえぐらかしとうへさんと色くみ
詞をつくせど中〳〵合点をるけゆえ紀あく。そのうへこの女
元来あれりのあれいまる北八をもあぐりものみせんとあぐら
あ同を呼ふ。北八い首筋のあとらぞくと身の毛もぞ
ち是まそ。の雑沢をもうちゑれて眼い糸の如く鼻の下へこ
すをとふうちのぞ〳〵北八「サア〳〵是かうこで一盃やつく
吹〳〵げんきをつけ申せう。モシ先生とのお蜻さんの按
ぢゃアまる一盃飲ヤせう延「ヤレそアこは。ことうらモウ

女のことあんでもごめん〳〵ちら「うらも同志ぢゃ酒いちく
とふくござる北八「ソレ丸あせへその酒のるサトをろとさみ延「あん
ふせろ雨安を絲に孫ふ着られさアで衣服のあうぐこぐ
めへてどうせるゆもあらぬモシちら「うらも頭巾すぐ〳〵めう
とられて頭あいかれあつるモシ北八「頭巾ぐあくって頭あいめ
とへコリヤア位趣向感心〳〵トいふうちさけ北八「サア〳〵先生
一ッおそぐめあせへソレお蜻さんお按ちゃ「ちら〳〵のお按ぢゃ
いけまるまの延「あふいけるぐアモシ北八「ソレ丸あせへ女ハどめん

ものしがれたまへ。お蜻さんとうちやアモウおめへみとがめを
さ〜ゆ〜。何一ツヤ ぶんのぬへ女ざがおめへふ亭主のあるう
玉ふ底ぐさを「ナあ〜〜ヨろこしやお前うふ加十さまも打ぜて
ざうおちよいやかエ北八「あんのくいやどあろうぞっこん首ッ丈
おさと「虚蛍へぞうちうッ赤ゆる。まさ弥次さんのやうふ夜逃
ふ赤蛍へとつく北八「どうしてく班度逃ますやおめと一所
サ蛍「ぐぐあいも〜まそとそうゆあい北八「ナニ弥次さんとい
ちつと遠ひ北案あさんあのうお蜻さんおさと「さよさそれ

ざふ早く弥次さんふ逢しあさんとの内ふ那方ふあるさふまん北
ク北八「ホンニそのあさふ北加〜吾もそのうまでうう氣ふあつく
ろくく酒のうど通ねへぐおめへの歌を又ちぐくふそのの
苦労をそれてあゆ〜さ。なでもとの内ふ待てみるとふつるふ
ちげへぬへふ郷弥次さんのねぬへどうもとうらねへお三「日
加らあいでへもそ〜あいヨ吾あ長沢お前ふいふ氣ふな
いが加十さまが邪魔あることっちやあいとて〜ハお前うかた
ロさふ雑儀をうけまふと思へべとそ。弥次弟さ濡さねふ

逢せおさのといひまして。あぜふお前に実分がなさい情ないと
人ぶんエト　えんとせあうをさうあれて北八「ア嬉しい〳〵。ナンノ情ごの
ぬへてゆがあるものの命も毋る氣ぶナントどうぶく〳〵せあうせいあ
もつけうあ
ものうらの紙屋番いふ奴ふ　ちくら「先生どうせるもかうせるもあいはあとい
ト（四きくうがあがあるきくう
中
奴ふ下ふ番先生と北八さんと已とが貸さこ牧の合羽のう
もつとる人ゲ下ふのさぶつく品物うつぷろげく落りふあん
とも蛮エモシ北八「ナニ山ら達ゲ弥次さんおかしく雨衣を拵こ
ある奴ゲ下ふ番ゑ。そいつらあ中いゆア供の者ろ世ゑこへ

ゑをゝそんぜるとらゑゑぶある。まりゝまちあせ。トふうちちきうり
女中さうあを北八「モシく今下〳〵雨衣とこ牧もつてきさこいふ人ゲ
もあきされバ
あるさうぶうありやアアの供ゲ又女中「の供ゲうあるりまゝぬへが今
書屋屋さアがきまゝゝッけ。大方その人ゲ持てきまゝゝッけ
お知まゝ〳〵ねへ迚「そんぶうちちゑうど思ふ。うらもあんぞ雨衣の
書手を相談のうぶるとうさゝ買ゆゝふキシ北八「そゆゆアの供
ふゝろをりのよいとうさ。モもその古屋屋をとへよんでくんあ
せへ女中「バイかゝとありまゝる　おりてもの紙ゲ下て古ぶや「どあさ。さ食も
ちぶゆあうろ

ようく入ッたあり／＼ものあるとうの心意ふうあるものハお
ざりませんヲウ京ゝの田舎向のおつてどうまさア　北八「俗さ
そんなふいくものを買ゆくるうち筆でのありやせんがちつと
お前の代呂物ふなて見てえものがあり度のぐ。それで
是まで御ようびヤ申ッさ。外でもどせへやせんが先刻下
でちらと合羽を見うけ申ッさ。あさやア賣てお呉な
せへ申ようる吉ヤ「イヤモウ買てさんぐされば俗でもあげヤこふ
先刻のいとれでどざいます　北「きせちるい

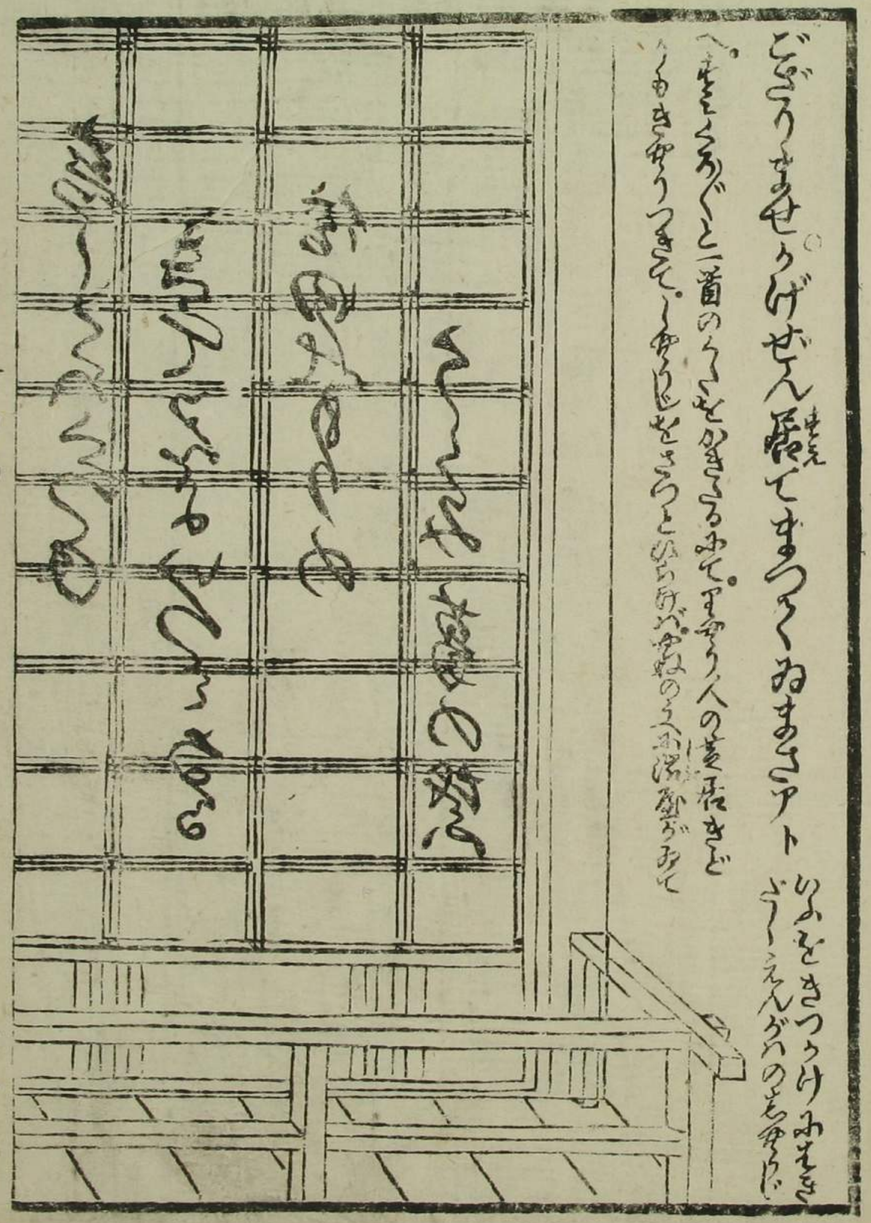
うらが両衣がうる物ふできるたアあんちふことど是ア／＼ら
合羽ざアちら「ヲ／＼ら／＼のもとふをるどアきせちるいく　北八「ふんふ
／＼こりゃアあの吾のぐ　「この合羽をもつてみせるからハ古呉屋
さアもう一ッ宅の拙ぐんぐア　「お客さまふ方いらんざるをおいひ
あさる私が代呂物をつく西前々ふおれがのくとめつそうふ
ふの合羽をうろんふるものくやうふモレ戯言ハおり高ふふ／＼ふ俗のぞ
ふ意ふいつく古呉をおくんふせつておくんふさいとかくお江戸
の虎ハ酒暮をおいひあさるので田舎者ハこきりの天神様ぐア

千菊園

北八「十二酒屋所うとの男ハとそうもぬへとの三枚の両衣ハ五
ゞ連の孫次郎兵衛といふ人ふかゝて是さくおりさ代呂物
ざゞどうゝてそれをおめへゞ持てゐあさるうとゞ一番賣どと
ろぶ。サアはゝまゞと真直ふ白狀いさせ「ハツ作りむふぞ金れ
ゞ委細ゆゝ上さそまつらん。某そうゝ代當扇屋ゆゝ方へ
是いゝゝ物とまり合さ獨の旅人所特の合羽を賣し
と主人の妻へさのその條時ふ幸それゞゝ。まゆり合せてゞ
んの両衣買取ゝ代金ゝとゝの機屋も新人もふ。さゞね

ぬり志をりとそなれ。貴殿方のおめゝとある稱元の取次ふ
何ゆゆからんと直さ為上商賣ゆと思ひの外うゝてかうの
さ酒作何かうふのさまふとも身ふおゞえあきむゝつの災
難ふ質慮あのぎさそすゝるト北八「ヤアわざいさう
なりたりさそいうゝどちんゞても我でんゞゝ眼で白眼ゝ
ゝ人ハ蠟のさゝづる道ゆ見ゆるうゝさへて縄めふあのゆゝ孫次
郎兵衛どのゝ行へサアさつやりとこの北八ふ実せよ。コリヤお
晴姫そちゞとひゝいゆうゝふと明くれ志さふ孫次郎兵衛

どの口身のうへ是北白狀せぬふおそいとれある男拔身
が屋敷いあいから蝦夷松前のそてまでもひきづを行て
うしめを足もるぶけばうぬい古毛屋とな。その古毛屋の
ぶんざいでおぜ盜物を買とうる「古れいまるかいつる
るのおうづよ私もとより商人のあるが中みもたう為き
世渡雪のあーさの煙草入さむいふちうつと古布子何
でもかでも見さふーて賣買をるがもちまあれば。うりてう
あれバかひもるハナそれをふーんみ男ふまるいつても易て



ござうませうげぜん屋てまつくねまさアト　ひみをきつうけみまき
へ。きこうぐと一首のうたを書てるみて。すまうり人の芝居きど
うもきやうつきて。ーありじをさうとひら所ばかぬのうへ浮世ばなみて
ござーえんだのもやうど

あぶ
余りお客さま方の戯場ぢく〜がおうく〜ぎ
ゐ扇賣りの〜泥ぬりの志いのゝ筆ぢ見かく〜のぶゑ
をゆる間お菖の菜を一ト幕だ〜はゝとの挨拶ゐ二人の
戯場好もうち廻れてロをとぢ延高筑羅房白お蔭
でよい歌舞妓又物ゐ〜たりとの爲らぢロをそ〜く
どつとうち笑ひて一ト まづ酒をくゝかり〜ゐも罪あく
てひとをゐ〜

與羽一覽 道中膝栗毛第四編巻之中畢

山下